

高知県スポーツ振興県民会議
専門部会及びアドバイザーからの主な意見

■令和2年度スポーツ施策の進捗状況

【勝田アドバイザー】

(競技力の向上)

☆個人やチームが強くなるためには、選手の体の状態を根拠となるデータをもとに確認ができてることが大切。自分の体をしっかり管理できているので、練習の量が積めるし、モチベーションも上がる。

【渋谷アドバイザー】

(障害者スポーツ)

☆高齢者の健康づくりと障害者福祉の日常的な活動は、支援する所管が違うことからジョイントする機会が少ないと思われるが、イベントなどでジョイントすることができれば新たな取り組みが生まれるかもしれない。

【桑田アドバイザー】

(地域スポーツハブ)

☆行政からの財政的な支援が無くなることで、これまでの取り組みが無くなるようなことがあってはならない。地域スポーツハブが行う事業では、受益者負担を求めるなど収益を確保していく視点が大事。

☆スポーツ関係者だけで地域のスポーツ振興を考えても課題解決にはつながりにくい。スポーツとスポーツ以外の業種のメンバーがフラットな関係（対等）で組織し、社会的使命を果たすといった共通の目標達成のために取り組みを進めていく考え方を取り入れるとよいのではないかな。

☆それぞれの地域スポーツハブが行うスポーツ活動は非常にいいものできていると思うが、今後は、地域や社会の課題や目指す姿に寄与する取り組みをどのように行っていくのか、大きな視点での取り組みが重要になってくると思う。

【競技力向上部会】

(高知県スポーツ科学センター (SSC))

○感覚的なアンケート結果の公表ではなく、データを効果的に活用することについて工夫してもらいたい。

【地域スポーツ推進部会】

(スポーツ J AMフェスタ (県が主催するスポーツ体験イベント))

○告知の方法や障害者の参加が得られにくかったといった課題がある。目標値や評価ということを厳しく見ていくことが必要。

■スポーツ振興の強化ポイント①

ウィズコロナ&アフターコロナの社会におけるリモートによるスポーツ環境の整備

【勝田アドバイザー】

☆オンラインを活用しコミュニティを形成していくことは、今後の長寿化や過疎化の課題解決に向けた新たなツールになると考える。積極的にアピールしていくことが大事

☆リモート環境を整備する拠点に、こういった組織やエリアの対象者を巻き込むことでさらに取り組みが充実していくのかを議論し、子どものスポーツ環境の整備やスポーツツーリズムの取り組みなど、全ての事業で効果的に活用されるようになることが大事。

☆競技力向上の観点でも、アプリなどを活用して心拍数や睡眠の質などを把握することが可能なので、コンディショニングの管理や怪我予防につなげることができる。個人の変化をこまめに記録することは強化に直結する。全てがデジタルになるものではないが、こういったデジタルをいかに身近なものにするかが重要。

☆集まるのが難しい状況下で、子どもの移動手段や高齢者の孤独感などの問題に対し、子ども向けのスキルドリルやアプリを活用した体の状況把握など、うまくオンラインを活用して利用者へ声かけができるツールを開発しておくといい。

【マセソンアドバイザー】

☆カナダでは、乳幼児から高齢者まで様々な年代を対象としたプログラム動画を、行政がオンラインで配信している。動画には地域の方や障害のある方も登場し、障害者向けのプログラムとしてではなく、誰もが活用しやすい工夫がなされている。

☆また、高齢者向けのウォーキングであれば、〇分間で〇歩といった目標を設定し、同時刻に地域の人達がスマートフォン等でアクセスして、地域毎の歩数の状況を共有するなど、デジタルだからこそのできる形で運動を楽しんでいる。

【渋谷アドバイザー】

☆リモートを活用した事業については、サテライトでどれだけ活用されるかが肝になるので、運用のサポートを充実させることが重要。サテライト側で受講者をサポートすることも考えてみればよいのではないかな。

☆部活動指導員についても、部分的にでもオンラインを活用し、複数の学校を指導するようなことも考えられるのではないかな。

【桑田アドバイザー】

☆今後、リモートが主流になるとは思っていない。リアルで安全にできる環境を担保するために、リモートが補完するといった考え方がいいのではないかな。

【間野アドバイザー】

☆競技力向上におけるデジタル技術の活用については、例えば高知県スポーツ科学センターなどが、競技別の活用事例を各競技団体に紹介してみてもどうか。

☆リモートは必ずしもリアルタイムでなくてもかまわないので、いつでも映像からスポーツをすることが出来るメリットがある。YouTube を活用し、様々な運動などのプログラムなどを蓄積してみてもどうか。

☆情報収集は双方向型が主流になっている。リモートの活用についても、SNSなどを活用し、利用者からもコメントなどで情報を収集することも行ってはどうか。

【競技力向上部会】

- 体育やスポーツは対面で行うのが原則であり、全てをリモートで行うことは難しい。対面でなければ伝えられない部分とリモートでも行える部分をうまく組み合わせることが重要になってくる。
- 障害がある方は、移動が困難な方が多い。リモート環境が整備されることでそういった課題に対応でき、スポーツ活動の入り口として非常に可能性があると感じている。
- サテライトの集会所、文化会館等でリモートによる教室などを実施する場合には、まとめ役の方の役割が重要になると思う。
- 高齢者の方は若い世代と比べ、コロナへの不安を感じている方が多いと思う。リモートでのスポーツサービスを提供するのであれば、高齢者に対して Wi-Fi の貸出しも考えるべきではないか。

【地域スポーツ推進部会】

- 従来の対面型のイベントなどを強化していくことに併せ、リモートを活用したスポーツサービスの提供など、アフターコロナに合わせ、新たな視点からスポーツサービスの提供を進めていただきたい。
- 会社勤めの方は、全体的に運動量が不足しており、リモートなどを活用して日常的に運動できる機会を作っていくことが大事。
- コロナ禍で食事や運動に対して興味を示している者が増えているように感じる。個々のニーズに応じて必要な情報を見られるようなコンテンツをこうちスポーツ NAVI で情報発信していくことが大切ではないだろうか。
- リモート活動の実際の運用時に機器の使い方をサポートする人がいないと問題が起きた際に現場レベルでは対応できない場合もある。人的な部分でも配慮していただきたい。

■スポーツ振興の強化ポイント②

地域における子どものスポーツ環境づくり

【マセソンアドバイザー】

☆カナダでは、スポーツをする際、競技団体に登録する仕組みが出来ており、所属チームやレベル等がわかり、データを見てスカウトされる場合がある。また、経験した競技以外からも声がかかることもあり、子ども達の可能性が広がる良い仕組みだと思う。

【渋谷アドバイザー】

☆部活動を週末は地域に移行する取り組みについては、まずは、県内で取り組みやすい学校をモデル校とし、取り組みを横展開できるよう進めてみてはどうか。武道など、町の道場などで多世代が活動する競技などは、地域に移行しやすいかもしれないが、団体競技などは課題が多いかもしれない。

【桑田アドバイザー】

☆国から土日の部活動を地域に移行する方向性が示されたが、現在、小学生と中学生を対象に基礎技術を教えるスポーツアカデミーの立ち上げを検討しており、中体連などと協議しながらモデルケースを何カ所かで実施しようとしている。これまでの延長線上だけでなく、民間の発想を取り入れて進めることも必要ではないか。

【間野アドバイザー】

☆高知県は、東西に長く、また子どもの少ない地域も多いのでスポーツをする場合における移動が課題になると思う。

☆これまでオリ・パラや国体での競技種目が部活動として身近に始めることができたことが日本の良さであったが、少子化により現状では成り立たなくなっている。A高では野球、B高ではサッカーなど、競技種目の選択と集中も検討しなければならないと思う。

【競技力向上部会】

- 進学時に、良き指導者に学ぶ環境や希望のスポーツを実施できる環境に結びつかない場合がある。継続的にスポーツを行うためには、市町村の地区大会の実施など小さなことから始めることも一つの手ではないか。
- ドイツでは、地域のスポーツクラブなどで保護者も巻き込み、子どもの遊びからスポーツに繋がるのが自然にできており、地域ぐるみでスポーツに触れる環境が整っている高知県でもどこかそういった場所ができればよい。既存の施設でも、全年代が集まりスポーツに触れる取組があると繋がっていくのではないか。
- 年少から年中の子どもは単純な運動や遊びが好きで楽しんでいる。年齢が上になると運動やスポーツが好きな子どもの割合が減っている現状を考えると、保・幼から小学校、中学校への繋がりが大事ではないか。

- 中体連では、これまでも中学生の強化を行ってきたが、これに加えて小学校から中学校、中学校から高校へつなぐ形の強化を担えれば、スポーツ振興にさらに貢献できるのではないかと考えている。
- 団体競技は高知市内でも部員が集まらずに部活動が成立しない状況がある。将来に向け、競技の拠点づくりは考えていく必要がある。
- サッカーの高校年代では、クラブチームと部活動が対戦できる仕組みがある。他競技でも同じ仕組みが考えられるのではないか。
- 部活動の考え方を考えていかなければならないのではないか。学校に特色のある部活動を残し、生徒が学校を選ぶことができることも必要ではないか。
- スポーツの活性化、学校部活動の活性化、競技力向上の観点からも、専門家や競技に精通した外部指導者の発掘や教員の配置なども考えてもらいたい。
- 障害者は、生活の基盤がしっかりしていないとスポーツをすることは厳しいと感じている。また、スポーツを続けるためには、経費面の負担やスポーツ情報の不足などが課題となっている。

【地域スポーツ推進部会】

- 市町村のなかで、スポーツに関する受け皿がどのようなものがあるか、考えないといけない。市町村が先導できなければ、地域のスポーツ団体（総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団などの民間の団体）が自発的に、地域のスポーツをコーディネートする機会を作る必要がある。
- 運動部活動を学校単位から地域単位で進めていく場合、教師の代わりに指導にあたる地域の指導者の処遇や身分等、立場が大事になってくるのではないか。
- 地域のスポーツクラブなどが、学校の運動部活動に指導者を派遣する場合、予算の関係で指導回数が減るなど、現状の仕組みでは積極的に指導に携わりたくてもできにくい場合がある。
- 普段の部活動の時間帯から考えると、仕事の時間の調整が可能な方でないとなかなか携わることはできない。会社等で勤務している方に、土日の指導をしていただくなどの方法を考える必要がある。

■スポーツ振興の強化ポイント③

本県の特徴を生かしたスポーツツーリズムの活性化

【渋谷アドバイザー】

☆ツアーパッケージなどを、旅行業者など民間の協力も得ながら新たな視点でつくっていくことが必要ではないか。合宿期間中の食事場所の雰囲気やリフレッシュする場所の紹介など、スポーツ関係者以外の視点を取り組みの充実につながるのではないか。

【間野アドバイザー】

☆企業の研修メニューとしてスポーツを盛り組んだプランを検討し誘致してみてはどうか。高知県の自然を活用したラフティングなどは力を合わせて行うスポーツであり、チームビルディングの一環となる。高知県版の「Go to スポーツ」などの打ち出し方も面白いかもしれない。

【桑田アドバイザー】

☆ツーリズムも含めたプロモーションの情報発信には、ユーチューバーを活用が有効である。

【競技力向上部会】

- チームが行う合宿としては、チームビルディングとしてリフレッシュや慰労を兼ねた合宿もあり、高知県でいうと海や川を活用した体験や自衛隊駐屯地でのアーミートレーニングなど、新たな資源を活用すべきである。
- スポーツ合宿では、本県で一番施設が充実しているのは春野総合運動公園だと思ふ。今後も、多様な競技で合宿を受け入れられるように施設の充実に取り組んで欲しい。

【地域スポーツ推進部会】

- コロナの影響で旅行の形態は変化しており、現在「マイクロツーリズム」がトレンドである。旅行先を決める基準や楽しみ方が多様化しており、「ユニークな体験」、「健康」、「挑戦」の3つがポイントになってくる。